

新しい教科書に期待すること

おきた のりつぐ
沖田 悟傳

この度、学習指導要領が改訂され、中学校ではいよいよ2021年度から新しい教科書を使った学習がスタートする。これまでの学習指導要領は、「教員が何を教えるか」ということを中心に組み立てられていた。今回の改訂では、学習指導要領を『学びの地図（学びの全体像を見渡す指針）』として機能させるためには、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」等、学習する側の子供の視点に立ったカリキュラムマネジメントが重要とされ、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善が求められている。具体的には、学校教育における質の高い学びを実現し、子供たちが学習内容を深く理解し、必要な資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けようとする意欲や姿勢を身に付けることがポイントである。

このような視点で今回改訂された『これからの数学』を見ると、前回の教科書と比べて大きく3つのことが、工夫・改善されていることが分かる。

1つ目は、教科書全体が、TRY、Q、例、問の4つの内容を中心に、構成・整理されていることである。特に、TRYについては、生徒が既習事項・知識を使って取り組む課題となっており、新たな学習内容への導入や数学的な活用場面において効果的な学習課題である。また、Qについても、その単元のポイントとなる重要な発問として扱われている。基礎的な知識・技能の定着や数学的な見方・考え方の育成のためにも、このTRYとQを効果的に活用することが求められる。

2つ目は、生徒同士の対話や先生との対話の場面、また、机を寄せ合ったグループ学習やペア学習の場面が効果的に取り入れられ、「主体的・対話的で深い学び」のヒントが多く示されていることである。「主体的・対話的で深い学び」の手法がよく分からない、どのような場面（単元）で行えばよいか分からない、生徒たちはどのような対話をするのか想像できない、といった疑問に答えてくれるであろう。大切なことは、このグループ学習の場面はあくまでも例であって、指導者の工夫によってより多くの場面での実現が望まれる。

3つ目は、別冊『探究ノート』が付けられたことである。この別冊を、単なる付録と捉えてしまっては惜しい。この内容は、様々な理由（分量、課題の難易度等）から教科書の本編で扱えなかった貴重な題材ばかりである。これらは、『深い学び』や『探究的な学び』への大きなヒントや示唆を与えてくれる。ある意味、この別冊を上手く活用できるか否かは、教師の腕にかかっていると言っても過言ではない。

教科書の定義は、教科書の発行に関する臨時措置法によって「教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書」と規定されている。そのような意味からも、今回、指導者としての使いやすさだけでなく、生徒の目線で読んで楽しい、よく分かる教科書に仕上がっていることは特筆すべき点である。

（同志社大学 教授）